

中川 渚

平成 25 年度「卓越した大学院拠点形成支援補助金」事業 研究成果レポート

1. 事業実施の目的： パコパンパ遺跡出土土器の分析
2. 実施場所：ペルー共和国カハマルカ県チョタ郡パコパンパ村
3. 実施期日：平成 26 年 1 月 10 日（金）から 2 月 27 日（木）
4. 成果報告

#### ●事業の概要

本研究では、金製品を伴う墓が検出されるなど、階層化の痕跡が認められるペルー北部、パコパンパ遺跡を対象として、物質的な側面と、それをとりまく社会的側面およびその変化について分析する。研究対象であるアンデス形成期（紀元前 2500 年から紀元前 200 年）は、土器や公共建造物が出現し、遠距離交易が活発化する時期であり、階層化が始まる社会であるとされてきた。中でも土器は、文字をもたない先史時代の研究において最も普遍的な資料であり、かつ日常用具、祭器、交換物と多様な側面との関連性をもつ。先行研究では特に儀礼との関わりが指摘されてきたが、製作・消費・流通を数量データとともに総体的に提示した研究はなされていない。本研究では、土器の製作・消費・流通を数量データとして把握した上で、土器にまつわる活動と階層化の進展との関連について解明することを目指している。

これまで実施した調査では、土器製作に関わる、各タイプおよび各器形の時期による数量変化を明らかにしてきた。この分析から、時期によるタイプや器形の変化が詳細に明らかになっており、この製作の変化が消費とどのような関係にあるのかが次の課題として挙げられていた。そこで今回の調査では、消費に焦点をあてた、出土コンテクストを持つ土器の分析と、流通に焦点を当てたボトル土器の形状分析を行った。前者は、土壌や墓など、出土コンテクストが明確な土器を抽出して、どのような土器がどのような目的で、どのように利用されたのかという観点から、器形、被熱痕の有無、残留物の有無等の属性を分析した。後者は、アンデスで広範囲に見られ、先行研究でもたびたび地域間関係の議論で取り上げられてきたボトル土器の頸部と口縁部の形状を分析することで、他地域との比較考察を行った。また、これらの土器資料の実測図作成、写真撮影、3D スキャンによるデジタル化を並行して行った。

#### ●本事業の実施によって得られた成果

消費に関する分析（出土コンテクストを持つ土器の分析）はまだ継続中であるため、全体的な傾向までは把握できていないが、少なくとも形成期後期になると大型の壺が土壌に据えられることが頻繁にあることがわかった。製作の分析でも、形成期後期になってこの大型壺の生産量が劇的に増加したことがわかっている。これらの壺は、被熱しているものと被熱していないものが両方存在しており、調理や貯蔵に使用したことが想定される。この時期に調理や貯蔵に使用する壺が大型化し、かつ祭祀空間と考えられるコンテクストで出土していることから、饗宴がさかんに行われていた可能性が考えられる。残留物が確認できる個体も確認できたため、今後は残留物の分析を含め、この時期に導入され、先史アンデスで饗宴の際に重要視されたトウモロコシとの関連性も考慮に入れながら分析を進めていく。

一方で、流通に関するボトル土器の形状分析については、他地域で言われてきた 3 段階の変化がパコパンパ遺跡では必ずしも認められないことがわかった。他地域では最後に現れる形状が、パコパンパ遺跡ではそれよりも前の時期にすでに存在しており、2 番目の形状と並存している。一般的にボト

ル土器の中心地は、パコパンパ遺跡がある山地ではなく海岸地域であると考えられており、3段階の変化もこの地域から伝播しているというのが通説であったが、最後の形状についてはパコパンパ遺跡が先行していることが明らかとなり、今後これが何を意味しているのかを考察していく必要がある